いもう
葦毛通信

2023年3月29日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町３丁目１
TEL：0532-56-6060
No. 135

ショウジョウバカマの蕾

1、2022 年度作業報告ー3

今年度の大規模植生回復作業は無事終了しました。今年度のもっとも大きな作業は、L地点のネザサの除去で、葦毛通信 No. 133･134 で紹介しました。以下では、これ以外の作業について報告します。また、昨年は１か所だけだったアズマヒキガエルの産卵が今年は７か所で確認できました。ここ数年産卵数が減っていましたが、産卵できる環境を復元することにより、産卵数が増えてきたものと思われます。花は、ショウジョウバカマが終わり、桜が満開になり、ハルリンドウが咲き始めました。４月中旬には満開を迎え、下旬にはミカワバイケイソウが満開になります。

１）イヌノハナヒゲの除去

Ｏ地点はイヌノハナヒゲが優勢になり、トウカイコモウセンゴケ等の湿生植物が抑えられている状態です。右上写真は 2022 年 9 月 5 日の状況で、昨年はイヌノハナヒゲを手前側だけ刈り取り、奥側は根から除去しました。

今年は手前側も根から除去する作業を行いました。作業を行ったところは、これからもイヌノハナヒゲを除去することにより、どのような湿生植物が出現・維持されるのかを確認するつもりです。

Ｏ地点は木の伐採・伐根作業後、多くのトウカイコモウセンゴケが出現しましたが、すぐにイヌノハナヒゲが優勢になって他の湿生植物の発芽が抑えられてしまった地点です。また、ヒメヒカゲがイヌノハナヒゲを食草にしているのは確認

O地点（2022 年 9 月 5 日）

O地点（2023 年 3 月 22 日）

したので、イヌノハナヒゲが増えることによってヒメヒカゲが増えることを予想して観察を続けてきました。しかし、この地点ではヒメヒカゲは積極的に生息範囲を広げることはありませんでした。

湿原全体では、植生回復作業を行って初期化した地点の多くでイヌノハナヒゲが出現し、その後優勢になる地点が多くみられました。O地点のように、数年たってもイヌノハナヒゲが優勢になって変化がみられないところがいくつもあります。

今後は、イヌノハナヒゲをある程度除去して、その他の湿生植物がどのように出現するかを観察していく予定です。

２）ハルリンドウの再生

ハルリンドウは、M地点に大群落があり、４月中旬に開花の最盛期を迎えます。この付近だけで多いときは 4,000 輪以上の花が咲きます。

隣接する木の伐採・伐根を行ったＰ地点は地表面に礫が見える状態が続き、植物の発芽が少ない状況だったので、イヌノハナヒゲを刈り取り、その場に敷いて地表面を見えなくする実験を行いました（葦毛通信 110・126 号参照）。

その結果、そこにハルリンドウが進出することが確かめられたので、Ｎ地点とＰ地点との境も、帯状にイヌノハナヒゲを刈り取り、刈り取ったイヌノハナヒゲをその場に残す作業を続けています（右写真）。

ハルリンドウは日照が確保されれば開花数が増えることが確認されています。ネザサの群落の中でも、霜が降りなくなってからネザサを除草して日照を確保すれば自生数が増えています。しかし、ネザサがあると他の湿生植物の発芽は阻害されてしまうので、周辺部分にハルリンドウが十分に分布を広げれば、現在分布の中心になっている地点のネザサを除去したいと考えています。

イヌノハナヒゲの刈り取り（Ｎ・Ｐ地点：南東から）

イヌノハナヒゲの刈り取り（Ｎ・Ｐ地点：北西から）

３）アズマヒキガエルの産卵

　昨年のアズマヒキガエルの産卵は、Q地点の③の池で１か所の産卵が確認できただけでした。今年は、R地点⑥の池で２か所、Q地点③の池で４か所、A地点の池で１か所の合計７か所で産卵が確認できました。

　湿地中心部のA地点では、かつては20匹近くのアズマヒキガエルが集まって産卵しているのを見ています。また、毎年のようにそこにノスリがきており、ノスリに捕獲されたアズマヒキガエルも何匹か見ています。

産卵に来たアズマヒキガエル

産卵直後（2023年3月5日）

産卵後７日目（2023年3月12日）

産卵後14日目（2023年3月19日）

産卵後17日目（2023年3月22日）

　しかし、近年は産卵がほとんど見られなくなってしまいました。A地点の池は泥が堆積して浅くなり、雨が少ないと干上がることもありました。今年は３年ぶりくらいに産卵があったので、石を積んで堰をつくり、水位を調整して干上がらないようにしています。Q・R地点の旧水田部分に復元した池（一年中水のある水田）も、作業後３年目でアズマ

ヒキガエルの産卵が多くみられるようになり、今後順調に増えていくと期待できます。

2、ポリネーターを増やそう！

葦毛湿原では、花は咲いても種子をつけないホソバリンドウやコオニユリ等の植物があり、人工授粉を続けています。コオニユリのように人工授粉により 80%以上が種子をつけたものもありますが、ホソバリンドウのように結実率が 30%程度のものもあります。

人工授粉は、あくまでも**緊急避難的な方法**で、絶滅に瀕した植物の復活には有効な方法だと思いますが、継続的に続けることが困難です。そこで、花粉を運ぶポリネーターを増やす取り組みとして、**ニホンミツバチの巣箱を設置**しました。

１）ポリネーター調査の現状

葦毛湿原では、各植物にどのようなポリネーターが来ているのかを詳しく調査したことはありません。これまでも、ホソバリンドウに来ているのがコハナバチの仲間であることや、ノリウツギやムカゴニンジンに来ている昆虫を報告したことはありますが詳細は不明です。

ニホンミツバチは多くの種類の花を訪れることが知られています。このニホンミツバチを増やすことによって、多くの植物の受粉が進むだろうと予想しました。しかし、葦毛湿原では、ニホンミツバチは来ていますが、その数は多くありませんでした。葦毛湿原周辺の森は戦後植林されたものが多く、ニホンミツバチが巣をつくれるところがほとんどないことが原因と思われました。

そこで、葦毛湿原の植物の受粉のために巣箱を設置しました。

２）ニホンミツバチの巣箱の設置

材料は厚さ 36 ㎜のスギ板で、重箱式と呼ばれる形のもので、３段になっており、底部には掃除用の扉をつけました。大きさは一辺が約 30 ㎝の正方形で、全体の高さは 80 ㎝程度あります。

３月 14 日に葦毛湿原内の３か所に設置しました。ニホンミツバチが自然に巣に入ることを期待していますが、かなり確率は低いようです。巣箱作成の詳細な情報やどのような結果になるかは今後詳細に報告します。

林内に設置した巣箱